

# 図書館における実用：司書の目と耳 2007—JLIS編—

山田 稔\*

Minoru YAMADA

## ■ひとはなぜ分類するのか

大学院のとき、中村幸雄先生の講義のなかで「どうしてひとは分類をするのでしょうか」という話になった。

通常中村先生は、予定されたテーマ、例えば『情報の伝達』とか『主題』とかについて、数枚にわたる手書きのレジュメを用意されており、そのコピーを配って話をされた。先生が話し、質問をなげかけられ、自分はレジュメの表裏に講義をメモし、足りない時にはノートをとった。このレジュメやノートはわたしの宝物の一つである。

さてわたしが「どうして分類をするのでしょうか」と質問をしたのは、たしかまとまった時間ができてしまった日だった。この日のノートが何故か出てこないのではっきりしない。おそらく予定の話が早く終わったか、学期の最後に予定していなかった日に講義があったのか、ほとんどの院生が欠席して講義を先にすすめなかったのか（たしかその場には院生が2人だったと思う）、そんなところだろう。

中村先生の答えは「覚えきれないからでしょう」というものであった。そして次のようなやりとりがあったと思う。以下は私の記憶にもとづく創作だが、話のポイントは変えていない。

「ほとんどのひとが自宅の本棚の本を整理するときにカードを作ったりしないのは、それが記憶できる量だからです。」

「なるほど。」

「身の回りのことは、たいてい覚えられるくらいの量ではないですか。」

「たしかに。」

「しかしひとりではなく、組織的におこなう仕事となるとそうはいきません。覚えきれない量を扱う場合には、何らかの分類をして、事に当たる必要がでできます。」

「そうですね。」

「それでも人間の能力は凄いものです。いろいろな記憶術もありますし、円周率を長々と覚えているひともいます。」

日本の軍隊でのことですが、部下の顔と名前と、出身地などあと少しのことをきちんと記憶していた上官がおられて、“山田くん、君は大阪出身だそうだが、私も大阪にはこういう縁があってね…”とか“君の所のお母さんの具合はどうだ”とか、部下に声をかける。それがなるほど部下にとって当を得た話題ばかりで、あのひとの記憶力は凄いということでも有名であった。その上官の覚えていた人数が200人だという。

こういう話からすると、どうも200くらいが、ある程度の意味を理解して記憶ができる、その限界だろうということになる。」

## ■分類したくなる量

たしかに量の問題から分類の必要性を感じることはある。わたしは趣味で、町や村を歩いて今のひとびとの暮らしを観察している。写真も撮るのだが、カメラを2003年11月からデジタルカメラに変えた。写真をパソコンで見るのはス

\* 愛知淑徳大学図書館

ムーズで、順番にながめるうちに撮ったときの様子が思い出されてくる。ゆっくり見るには手軽で調子がいい。

ところがこの頃、「特定の写真を探す」のに時間がかかる。先日年賀状をつくるため、干支に関連する写真を探したときも大変だった。

探すときには一画面に数枚ずつ（縦3枚×横3枚程度）の縮小画像（サムネイル）を見ながらチェックしてゆく。だが5,000枚もあるから、どうしてもいい加減になってしまう。「とりあえず撮っておこう」という気持ちで記録するという、以前のフィルムの時とは違う撮影態度の問題でもある。そしてそんな風に撮ったものはすぐに思い出せない。今回、干支の写真は結局「該当がない」ことを確かめることになったのだが、なんとかしたいと思った。

ちなみに今年の干支、亥に関する写真は「なければ古いけどあれにしよう」と記憶にあった古い写真を、デジカメ以前の写真のアルバムから出してきた。

「どうして分類をするのでしょうか」

「覚えきれない、記憶には限界があるからでしょう」

これは理論と実務の両面から考えることを教えていただいた、中村先生ならではの答えだ。「実用」をふまえたこのことばは、わたしのなかに残った。

## ■顔面漂流記

かもがわ出版から『顔面漂流記』が出たのは1999年3月のことである。その後、この本は大幅に加筆されて『顔面バカー代』というタイトルで講談社文庫に入っている。

この本を書いた石井政之さんの顔の右側には赤いアザがある。「単純性血管腫」という病気だ。石井さんの場合はアザの原因となっている毛細血管が皮膚の深い部分にもあるため、植皮やレーザーの治療も効果的でないという。この本には彼の半生と、同じ境遇のひとと彼の対話がかかれていいる。今までにない内容のこの本

は、大きな反響があった。

ところでこの『顔面漂流記』の構想から出版までに、10年かかっているという。これほどの時間をかけざるをえなかった理由が『見つめられる顔』（高文研）の199ページに書かれている。

当事者を取材したノンフィクションがない。当事者の手記がほとんどない。あったとしてもそれは図書館の片隅にひっそりと眠る雑誌記事であり、ある患者会の機関誌に掲載された手記であった。探し出すのに苦労した。

「アザ」をキーワードに書籍を探しても、「アザは治ります」という美容外科医のPR本か、医学部学生のための教科書だった。これらの情報は、当事者の視点で見直すと、不十分なものが多い。この顔で生きるときに、直面するであろう困難、当事者心理の真実に触れる力強い言葉を見つけることができなかったからである。

当時のことは『顔がたり』（まどか出版）の11ページにもある。

今だってそうだが、日本で顔に病気を持った人の文献はまったく見当たらなかった。

図書館などで検索しても、出てくるのは医療関係の書物ばかり。ぼくが読みたかったのは顔に病気を持った人間のドキュメンタリーだった。その心理を書いた書物を探していた。

大学で化学を専攻し、その後フリーランスのライターとして仕事をつづける石井さんは、図書館をよく利用する。「顔にアザのある者の心理が正確に記された資料が、日本にほとんどないことは、それまでの図書館通いで十分すぎるほどわかっていた」（『顔面バカー代』188ページ）という石井さんは、情報を求めて1996年にアメリカまで出かける。

インターネットを使って基本的な情報を探し出し、顔にアザや傷のある人たちでつくるセルフヘルプグループを訪問し、ニューヨークの図書館で英語論文をコピーしてはため息をついていた。欧米には、当事者の肉声が記録され、誰でもアクセスできる環境が整っていたのである。私は日本の情報不足を嘆いた。（『見つめられる顔』199ページ）

石井さんはアメリカから帰国後、ほどなく『顔面漂流記：アザをもつジャーナリスト』を完成させた。

### ■『顔の変形と整容の心理』

その後、石井さんが出した本の一冊に『顔とトラウマ：医療・看護・教育における実践活動』（かもがわ出版）がある。これは彼が藤井輝明さんとともに、顔面の問題に関する最初の教科書として編んだ本である。

この本の「あとがき」の一部（209～210ページ）を、少し長くなるが引用する。読みやすくするため年月等の漢数字をアラビア数字に直した。

本書を編集するにあたって、私の脳裏をかすめたのは96年から97年にかけて8ヵ月ほど滞在したニューヨークで見つけた一冊の書籍だった。顔面に疾患外傷のある人の心理を40年以上にわたって研究した、アメリカの社会学者マグレガーの第一作の著作「Facial Deformities and Plastic Surgery」（共著・1953年 Charles C Thomas Publishing）を、コロンビア大学医学図書館で手にしたとき、その表紙がぼろぼろになっていることに感銘を受けた。コピーを取っては、つたない英語力で活字を追った。同書は幅広い人の関心を喚起する書籍ではないが、その問題に直面している人にとってはかけがえのない著作物である。人

類の歴史のなかで、好奇と侮辱の対象としか描かれなかった当事者を、人間として記録した最初の書籍の一つを手にして私は感動した。同書に記録された事柄が、顔面に疾患・外傷のある人を勇気づける大きなステップとなったことはいくら評価しても足りない。

その著作が日本語に翻訳されていることを、顔面に疾患・外傷のあるアメリカ人の当事者に教えられて、日本に帰国後、国会図書館でその翻訳書を手にとったとき胸が高鳴った。『顔の変形と整容の心理』（石井英男・台弘／共訳・1960年・医歯薬出版）。私と同姓の研究者による翻訳作業に襟を正す思いだった。（下線部は引用者による）

何ということだ。顔の問題に関する基本的な資料、それが邦訳されているにもかかわらず、図書館のヘビーユーザーが10年も発見できなかったとは。このくだりはトゲとなってわたしに刺さった。

なぜ図書館は、彼に、この本を提供できなかったか？

### ■手助けできなかったか？

わたしは石井さんの本をいくつか読むうち、もやもやした気持ちを抱くようになった。そしてマグレガーの著作の件を知るに至り、「彼や彼の家族に対して図書館は手助けできなかったか」という疑問が膨らんだ。

例えば彼が保育園の頃、ドライアイスを右頬にあてるという恐ろしく痛い治療から帰る車の中で、父母の口げんかを冷凍やけどの痛みをこらえながら後ろの座席から見ている。もしも彼と彼の家族が図書館に立ち寄ったとしたら、どんなサービスができるだろうか？

また学校を卒業する頃には、「人生のモデルとなる先輩」に出会うこともなく、「この素顔では就職できないと思いつめて」いたそうだと。彼には、突破口となる本との出会いはなかった

のか？

後に石井さんは「社会に出れば（中略）これぐらいの顔は許容される、ということが実際にわかった」と『自分の顔が許せない！』（平凡社新書）59～60ページで中村うさぎさんに話しているとしても。

### ■それでも図書館からスタート

家族の病気について相談しようとか、進路について調べようとか、それが深刻なものであればあるほど、問題を解決するためにわたしは図書館に出かけない。多くのひともそうだと思う。

子どもを思うなら、悩むより動くこと、行動を起こすことです。図書館に出かけて、「アザ」をコンピュータで検索して、関連本を端から読んでみてください。一般の病気と比べると、アザの情報は少ないですが、それでも探せばけっこうありますよ。

石井さんは「アザをもつ子の母の悩みに答える」（『顔とトラウマ』125～133ページ）という文章のなかで、まず最初に、上のように答えている。何をどう調べればよいのかわからないお母さんが行動を起こすきっかけとして、「図書館が調べるときのスタート地点だ」と励ましている。

そして、この文の直後には「図書館以外で情報を集める」方法も、いろいろ書いている。「アザ」で検索して、いい資料がヒットするとは限らず、本や雑誌だけが解決の手段ではない。

### ■図書館の実用

図書館を利用するひとの、深刻で重要な問題まで司書は考えなくてもいいと思うし、そうすべきでない。もっと「うすっぺらな」問題を設定すればいい。

「この本が読みたい」「こういう資料を探している」ひとに、求める資料を提供することが

できるかという問題だ。

図書館は世の中のひとに代わって、本を整理するのではなかったか。世の中に本は多すぎて一人のひとの手に余るけれども、ひとは本がないと困る。

そして司書の考えることは、求める資料を入手する確かさを、少しでも高くするためには何をすべきか、であろう。そして現在では「インターネットで調べるのがあたりまえ」になっていることを、忘れてはいけない。

「求める資料を提供する」という実用に役立つ技術を、司書は求めてきた。今、何が必要かは、紙面の都合もあるから、ここではこれ以上書きません。

それができれば、日々の暮らしに追われているひとの「実用に足る図書館」に少し近づくとと思う。